

## 海を渡ったメルヘン

### —日本昔話「手なし娘」の伝播経路を探る—

森 義信\*

#### 要 約

民話「手なし娘」は、日本のさまざまな地方に口頭伝承されているが、そのモチーフ構成・ストーリー展開はみな類似している。その理由は、この物語が16世紀中頃に西欧の人々によって日本へ持ち込まれたからである、と推定されている。すなわち、ポルトガルの船乗りや商人たちが最初に、種子島や鹿児島に上陸し、鉄砲などの西欧の先進技術を伝えた。続いて、イエズス会の宣教師たちがやって来て、キリスト教とこれに付随する種々の西欧の精神文化を持ち込んだ。宗教的な教訓を含んだメルヘンがまず九州南部に伝えられ、それは鹿児島から沖縄にいたる島嶼部に広まった。

その後、スペイン人やイギリス・フランス・オランダ人が到来し、彼らと日本人との交流の中心は、平戸・長崎へと移っていった。イエズス会宣教師たちの活動が、九州はもとより中国・四国・近畿地方に広がるにつれて、その精神文化たるメルヘンも広く伝播した。

しかし、キリスト教が禁止され、西欧世界との交易がオランダに限定されるにともなうて、西欧生まれのメルヘンは、徐々に非キリスト教化され、日本独自の内容に変容していった。切り落とされた両手が蘇えるという奇跡を起こす者として登場していたイエスや聖母マリア、聖ペテロに替わって、弘法大師や観音、地藏尊や神道の神々が登場することになる。

#### はじめに

「手なし娘」と筆者との出会いは、十数年前に伊勢の街を歩いていて、何気なく立ち寄った一軒の古本屋に始まる。書棚に日本民話の古書二冊『雪国のおばばの昔』と『炉端できいた昔』（いずれも講談社刊）を見つけて、手にとってみた。たくさんの楽しそうな昔話が収録されていたので、さっそく買い求めて、宿に戻って読んでみたところ、この二冊の本に新潟県、鳥取県、徳島県

の「手なし娘」の話がでていた。

かつて『グリム童話集』や『フランス民話集』を読んだときにも、これに類似した話が載っていたことに気づき、帰京してから関敬吾編の『日本昔話大成』や稲田浩二・小沢俊夫編の『日本昔話通観』、クルト・ランケ編の『メルヘン百科事典』やヴァルター・シェルフ編の『メルヘン事典』を調べてみたところ、日本だけでも100話を越えるバージョンがあり、世界各地から1500もの類話が採録されているということがわかった。また、こ

\*大妻女子大学 社会情報学部

の民話は地域的には、西洋を中心として広く分布しているが、イスラム世界、ついで東南アジアや日本、韓半島やモンゴルにいたるまでの広い地域に点在していることもわかった。

主人公の女性が、父親や継母、悪魔や鬼・山賊に両手を切り落とされ、苦難の旅の末に、心の寛い力のある男性と出会い、結婚して子どもを出産する。しかし、その幸せは束の間で、底意地の悪い継母や姑の計略にかかって婚家を追われ、再度流浪の生活を強いられるなか、最後に奇蹟によって両手を取り戻すという物語である。

この物語がなぜ世界中の人々に受け入れられ、語り継がれてきたのか、不思議な思いに取りつかれた筆者は、西洋やイスラム世界の「手なし娘」について、日本語で読めるものを中心にできるだけ集めてみたところ、20話ほどのバージョンが集まった。また、日本の昔話「手なし娘」については、その4倍ほどの数のバージョンを読むことができた。

日本と外国の「手なし娘」の物語に共通するモチーフは、「手」と「旅」と「奇蹟」である。女主人公の手はなぜ切り落とされねばならなかったのか、その意味するところは何か。また女性の人生にとって「旅」は何を意味し象徴しているのか、家とか姑はどのように観念されていたのか。そして最後に、切り落とされた手が蘇えるという「奇蹟」の意味するところは何か。

三つのキーワード「手」、「旅」、「奇蹟」を手掛かりに、このメルヘンについて少し調べてみたいと思うようになった次第である。こういう仕事は、しかし、短期間に集中的にしあげることのできる性質のものではない。あれこれと調べていくうちに袋小路、藪小路に入り込んで行き詰まったり、裏道、横道に逸れてしまったりの連続であった。その過程で、すでにいくつかの先行研究があることもわかった。たとえば、中山太郎は「手なし娘」の日本における最も古い書籍伝承として、「高野山女人堂由来記」を見出し校訂している<sup>1)</sup>。また新倉俊一はフランスの「ラ・マヌキヌ」に関する分析<sup>2)</sup>を、そして三原幸久は「手なし娘」に関するまとまった研究をそれぞれ公けに

している<sup>3)</sup>。これだけの蓄積があるのであるから、筆者の仕事はもう必要あるまいとの思いに苛まれ、幾度となく仕事を中断した。そんな折りに、高野山にのぼり、ただ一つ残る女人堂なる建物をみて、筆者なりのアプローチの仕方、切り口、調理法もあるのだからと、気をとりなおしてやっと辿り着いたのが、本稿である<sup>4)</sup>。

「手なし娘」と称される昔話は、北海道と東京、大阪・愛知などを除く、大半の府県で採録されている。これを日本固有の物語であるとする人はいないが、いつごろ、どのような経路で日本に持ち込まれ、それがどのように広まったのかはよく解っていない。

筆者は「メルヘンは時の移ろい、人の移動とともに、旅をする」という想定のもと、今日まで伝わる日本の「手なし娘」もまた、海を渡ってきた南蛮人や紅毛人によって持ち込まれ、今度は日本列島をキリシタンや商人、僧侶や船乗りとともに旅をして、各地に広まったものとの仮説的見通しをもっている。本稿の考察を通して、この仮説を実証してみせること、さらにできることならば、そのルートまでも明らかにしてみることが本稿の目的でもある。

## 1 日本の「手なし娘」の各種バージョン

まず、日本の「手なし娘」の典型的なバージョンとして、稲田浩二・和子の編著になる『日本昔話百選』（三省堂、1971）に収められている、新潟県長岡市で採話された「手なし娘」の話を見てみよう。紙幅の都合上、全体を半分ほどに要約してある。

### 1-1 腰巻きもしないで裸で踊った

美濃の国に、さんぜんさという身代の良い家があり、その息子はもう嫁をもらう年ごろであった。あるとき、「大阪の鴻池にばかにいい娘が二人いる」と人が話しているのを耳にしたので、息子は訪ねて行くことにした。息子は反物がかつぐと、呉服屋のような顔をして大阪の鴻池へ行き、姉妹に会う。どちらも良い娘だが、とりわけ姉の

方を気に入り、姉娘をもらいたいと申し入れた。ところが鴻池の姉娘は継子だったので、母親は美濃の国の大した長者さまへもらわれるとなれば、自分の産んだ娘をやりたくてどうしようもなくなったという次第。ある日母親は、

「美濃の国のさんぜんさへ嫁に行くのだから、遊び友だちに別れぶるまいをしよう」

と言い出して、友だちを呼び寄せた。その会のあとで母親が父親に、

「娘が友だちをよんでの別れぶるまいに、あんまりうれしがって、腰巻きもしないで裸で踊っていた」

という偽りを述べた。父親もたまげて、

「そんな娘はあの旦那さまへは嫁にやられぬ」

「それなら、ほうせんば山へ花見に連れて行って、殺してくんなせ」と母親は言う。

父親は、母親のうそを本気にして娘を山へ連れ出し、娘の両手を切って谷底へ落とし、家へ帰って来てしまった。そうして母親は、美濃のさんぜんさに手紙を書いて、

「あれは病気で死んだすけ、妹を嫁にもらうてくれ」と言いましたが、

「いや、妹ならいらぬ」という返事でした。

両手をもがれた姉娘は、どうやらこうやら川から這いあがり、

「おれは、さんぜんさの嫁に決まったども、もう手も無いすけ、いまさら嫁げぬ。せめてどんげな家だか家だけでも見たいもんだ」

と、訪ねて行った。行ってみれば立派な家で、門の脇には、うまさうな柿がいっぱいになっていた。手なし娘は腹がすいてどうしようもなかったもので、口をつけて柿を食べていたところ、家の者に見つかって、腕をもがれた次第を語ったところ、息子は

「お前は家の嫁ときまった娘だ。手なんか無いたっても、どうか嫁になってくれ」

と言い、さっそく若旦那の嫁に迎えられて、大切にされたということである。

そうこうするうちに、若旦那は仕事で西国へ行き、その留守に玉のような男の子が生まれた。その知らせの手紙をもった若い衆が、道中、嫁の里

に寄って酒を飲んで酔いつぶれてしまう。継母は若い衆の話から、さんぜんさの家の男と知って、懐からそろっと手紙を抜き出して読んでみた。

「玉のような男の子が生まれたが、何という名にしよう」と書いてあったのを、「鬼のような子が生まれたが、あんげな嫁は出したがよかろう」と書き替えてしまった。その手紙が若旦那のところに届いたので、折り返し「いくら鬼のような子でもおれの子だ、嫁は出さずにおいてくれ」と返事を送る。飛脚の若い衆はまた嫁の里に寄って、こんども酒を飲まされて酔いつぶれ、手紙は「そんげに鬼のような子どもを生む嫁は、すぐに追い出してくれ」と書き替えられてしまう。

これを読んだ両親は、息子の気持ちがさっぱりわからんと首をかしげながらも、嫁に子どもを負わせて、銭を持たせて家を出したそうである。

手なしの嫁が、あちこち歩いていると水が飲みたくなり、川ばたへ行って口をつけて飲もうとしたら、背中の子がずるっとずり落ちてきて川の中に落ちそうになる。はっと思ったとき、ずらっと手がはえてきて子どもを押さえてくれた。右の手も左の手も出てきたのである。

「ああよかった、子が助かってよかった、両手が生えてよかった」

と、そこらを見回しますと、そばの地藏さんには手が無くなっていたということである。

「ああ、この地藏さまがおれに手を投げてくれたらしたか」

と嫁はひどく喜び、そこへ小屋を建ててお地藏さまをお守りしたという次第。

そうこうするうちに、若旦那が西国から戻り、いろいろ調べていくうちに、継母の悪だくみにひっかかったと分かってきた。彼は妻子を探索する旅に出、あちこち尋ね回って、川ばたの地藏さまのところに辿り着く。そこで自分の嫁さんと再会し、子どもにも会えたということで、盛大なお祝いをして仲良く暮らしたということである。

### 1-1-1 三部構成のストーリー展開

以上が新潟県に伝えられている「手なし娘」の物語である。「さんぜんさ」というのは、おそら

く屋号だと思われる。また「鴻池」は、江戸時代に酒造、海陸運送業などで栄え、のちに両替商として財をなした大阪の富豪のことである。美濃の国の「さんぜんさ」が鴻池の姉娘を嫁にもらおうとの設定であるが、当の女主人公は、お別れ会の席上、少々淫らな振る舞いがあったとの継母の讒言によって、不幸な境遇においやられた。

日本の各地に伝わる「手なし娘」の物語の各種バージョンについては、これから見ていくが、ほぼ共通して次のようなストーリー展開になっている。

A 継母が継子を憎んで腕を切って家を追い出す⇒B 長者の家の果物を盗み食いして見つかり、手なし娘はその息子と結婚する〔以上が第一部〕

C 夫の留守中に子どもが生まれ 手紙の改竄によって母子ともに婚家から放逐される〔以上が第二部〕

D 母子は放浪の身となり、奇跡によって主人公の手が再生する⇒E 夫に発見され、以後は幸せに暮らす〔以上が第三部〕

日本の「手なし娘」およびその類話の採話数は、関敬吾氏の『日本昔話大成』(1978)と『日本昔話通観』(1985~1998)などに採録されているものを総合すると、110話ほどになる。その大半は以上のようなモチーフ構成をとるのだが、バリエーションがきわめて少ないという事実から、三原幸久は「一般に形の変化の少ない話型はたとい類話数が多くとも、広まってからの歴史は浅い」と考えている<sup>5)</sup>。

### 1-1-2 宴席で若い衆に酌をしたから

鳥取県東伯郡に伝わる「手なし娘」の物語も似たようなストーリー展開である。煩を厭わず紹介する。

飲食店(のみくいや)を経営する男のもとに、お政という女性が小春という子を連れて後妻に入るが、この家には小杉という器量の良い子があった。あるとき、江戸からやってきた松之進という殿様が小杉に惚れ、嫁にくれるよう小杉の父親に願い出て、双方合意して、婚約が整う。

父親は嫁入り前の小杉を酔客の前に出すことを止めていたが、お政はこれを妬んでいたため、夫の留守中に、村の若い衆が飲みに来た席に小杉をむりやり出して酌をさせた。帰宅した父親がこれを咎めると、小杉は継母に命じられたことを告げる。お政はこれに立腹し、小杉を山奥に連れて行って、肩から両手を切ってすて、彼女を滝に突き落としてしまう。

小杉は奇跡的に途中の藤蔓に引っ掛かり、奥山から出てきた熊に助けられる。熊は小杉の傷口を舐めて癒し、野原に連れ出してくれた。小杉は畑の西瓜にかぶりついて飢えと渴きをいやすが、やがて農家の人に見つかってしまう。村人は小杉に同情し、家に連れ帰って世話をやき、松之進に知らせる。殿様は手が無くても小杉には違いないとして妻に迎え入れる〔第一部A・Bに相当〕。

松之進が江戸参府のあいだに、小杉には男児が産まれ、杉松と名づけられる。このことを知らせる手紙をもった足軽が、お政の酒屋に寄り、酔わされてしまい、ここで手紙は継母お政によって、「鬼とも蛇ともつかないものが産まれた」とされてしまう。夫はそれでも大事に育てるとしたためだが、この返書も継母によって「鬼とも蛇ともつかぬものは、小杉に背負わせて追い出せ」と改竄されてしまう。夫不在のあいだ小杉母子が身を寄せていた家の主人も、この手紙には困惑するが、母子を追い出すよりほかなかった〔第二部Cに相当〕。

小杉は高野山にあがって茶店などで働くしかあるまいと決心し、歩いて行くとお坊さんに出会う。お坊さんはこの先の谷で水を一口飲めと勧め、小杉は言われたとおりにする。やがて大きな川にさしかかり、これを渡らねば高野山にはあがれない。小杉が川の途中まで来たところで、杉松がきゅうに仰向けにのけぞり、水中にドボンと落ちてしまった。小杉は必死の思いで救いあげようとすると、その瞬間に手が出てきて子どもを拾い上げることができた。母子は高野山の山道で参詣者への茶の接待をするようになった。

松之進は事情を知って困惑し、髪をおろして六部の姿になり、妻子を探して全国を行脚して歩い

た。最後に高野山にあがったところ、妻子との再会が叶ったという次第〔第三部D・Eに相当〕。

この物語における継母による継子いじめは、実子の嫁入りを果たせなかった母親の悔しさが、根底にある。両手の切断については、継母が直接手を下しているが、その理由は、小杉が父親にむかって「お酌をしたのは継母に強いられたからだ」と告げ口したことにあった。武家に嫁ぐことがきまっていたとはいえ、飲み食い屋の娘が酔客の相手をしたというだけで、殺されかかったというのであるから、読み手としては得心がいかない部分がある。

以上に紹介した二つの物語は筋書きが良く似ている。1-1では継母の讒言によって実父が、1-1-2では主人公が告げ口をしたとして継母が、主人公の腕を切り落としている。ずいぶんとひどい話であるが、日本に伝わるこの民話では、両手切断の経緯が、おしなべて理不尽であり、かつ不自然なのである。

## 1-2 手を切られたわけ

日本の「手なし娘」はどれも、全体の構成が画一的であるというだけでなく、たとえば主人公が手を切られる場面など、細部についてもバリエーションが少ないと言える。

これに反して西洋の「手なし娘」の種々のバージョンでは、主人公の手が切断される理由は、次のように国・地域ごとに多様なものである。

- ① 娘が父なし兄との結婚を承諾しないため（近親相姦型）：イタリア、フランス、スペイン、ドイツ
- ② 父親が娘を悪魔に売り渡したため（悪魔型）：イタリア、フランス、スペイン、スイス、ドイツ
- ③ 娘が神に祈るなどの禁止に違反したから（信仰型）：スペイン、ドイツ
- ④ 母親ないし継母の娘に対する嫉妬から（継子型）：ギリシア、フランス、スペイン
- ⑤ 嫁が義妹＝小姑との葛藤のすえ、実子を殺害してしまったから（兄嫁嫉妬型）：イギリ

ス、ブルターニュ、ロシア

- ⑥ 娘が貧者に施し物を与えるなどの禁令に背いたから（施物型）：イスラム世界、スペイン
- ⑦ 娘婿が義父の戦勝を妬んで（嫉妬型）：イギリス

ただし、②と③とが混交しているバージョンがいくつかあるなど、截然と分類してしまうことが難しい場合もある。

### 1-2-1 継子型

日本各地に伝わる手なし娘の物語で、主人公の手が切断される理由は、西洋のバージョン④にあたるものが圧倒的多数を占めている。つまり、「継母が継子を憎んで」、あるいは「継母が結婚について実子を優先しようとして」、さらには「継母が主人公を憎むあまり、継子が不義の子を産んだと偽って」、両手を切断して家から追い出すパターンで、110話中100話もあり、全体の九割を占めている。型にはまってはいるが、日本各地に伝わる「手なし娘」の物語を、この部分に限って、順次紹介していこう。

④-1 長崎県有明町で採録された話では、母に死に別れた女の子のもとに、継母がやってくる。不幸は続くもので、娘は間もなく父親にも死に別れる。継母は娘の両手を切って家から追い出し、家に乗っ取ってしまうというもの。

④-2 長崎県下県郡に伝わる話でも、継母が継子の生き肝を取ろうとしている。父親は娘を山に連れて行って殺そうとするが果たせず、娘の両手を切り、鳥を捕えてその肝を取り出して証拠に持ち帰っている<sup>9)</sup>。

④-3 長崎県下県郡巖原町に伝わる話は、次のようなものである。

親孝行の息子が母親と住んでいて、魚を売って商いをしていた。あるとき、浜辺で鮑に尻を挟まれている猿を助けてあげると、猿は恩返しに、朱紅という染料のもととなる土塊をくれた。大阪の鴻池に持っていくと、えらく高い値で買い取ら

れ、息子はこれを元手に商売を始めて成功をおさめる。息子は猿待と呼ばれるようになった。

彼は嫁捜しの旅に出て淡路島に辿り着き、ある姉妹に出会う。姉のお清のほうはたいへん美人であったが、お清は継娘で、継母は実子を嫁にやりたいがために、姉への縁談をすべて断っていた。息子はお清に直接会って祝言の約束をしたが、継母がこれを知って、お清の片腕を斬って家を追い出してしまう。

お清は途方に暮れるが、気を取り直して猿待のもとへと急ぐ。その途中で、山賊に出くわしてしまい、貞操を守ろうとして抗ったため、ここでもう片方の腕を切り落とされてしまう。それでもお清はなんとか大阪に出て行く。

④-4 鳥根県邑智郡に伝わる民話では、実子を嫁にやりたいばかりに、継母は自分の病気は生き肝を食べなければ治らないと言い張り、継子を殺して肝を取ってくるようにと手代に命じる。

④-5 鳥取県東伯郡（前出1-1-2参照）

④-6 京都丹波地方のバージョンでは、継母が、継子にもちこまれた代官との縁談話をなんとか実子に回せないものかと思案する。継母は、代官がこの縁談を断って実子に目を向けてくれるようにするためには、まず継子の手を切っただけで済ませればよい、との考えにいたり、それを実行する。要するに、身体に欠損があれば武士の妻にはなれないはずだ、との考えが根底にある<sup>7)</sup>。

④-7 徳島県三好郡で採録された話は、良い縁談を実子に回そうとして継子を憎悪する型の話である。継母は祭礼に着飾った実子を連れて出かけ、継子には一升の麦の殻を手で剥いてから来いと言いつける。継子は隣の婆に手伝ってもらって仕事を済ませると、身づくろいをして祭礼に出かける。そこで殿様に見初められ、嫁に所望される。継母は「おまえのけっこい（美しい）手が見たい」と言って手を出させて、斧で両手を切ってしまう。結婚を約束したはずの殿さまは、主人公

の両手が無くなっているのを見て、嫁にもらうことをやめてしまう<sup>8)</sup>。

④-8 新潟県長岡市（前出1-1参照）

④-9 福島県南会津郡に伝わるバージョンでは、夫が出稼ぎで留守中に、継母は法印と馴染みになって好い仲になる。法印とは仏教の最高の僧位を示す言葉であるが、転じて僧侶一般を示すようにもなる。また、祈祷師や山伏をさす場合もあったということなので、この物語に登場する法印の実態はよくわからないが、いずれにせよ世俗の人間とはいささか違った人種ということである。夫の留守中にそういう関係になったので、継子が邪魔になり、継母は口封じのためにも継子を無きものにしようと企む。娘を箱に入れて崖から落とすと、娘はとっさに腕を出して木につかまらすが、法印がその腕を切って落とすという次第。

④-10 青森県の三戸に伝わる「手っきり姉さま」の舞台は、大阪のような大きな都市。美しい一人娘のいる大金持ちのところに、後妻がやってくる。心がけの悪い女性で、賢い継子を憎み、殺したいとさえ思うようになる。夫が江戸に出かけた留守に、家来どもに命じて、娘を山奥に連れ出して殺すように命じた。家来たちは殺すに忍びなく、娘の両手を切断して置き去りにしてくる。

④-11 沖縄県宮古郡伊良部村に伝わる話には、継母の嫉妬が原因で片手を切り落とされ、家を追い出された主人公が、各地をさすらうなかで乱暴者にいたずらされて妊娠し、子どもを産むというものがある。前出④-3と共通する部分もあるが、これまでに見たどのバージョンよりも凄惨な、二重三重の苦難を背負った女性の生きる姿を浮きぼりにする、恐怖のバージョンと言える。

以上、継母と継子の家庭内のもつれに端を発している④のバージョンを都合11例見てきた。④-1では、継母=後妻は、連れあいの亡くなったあと、娘を家から追い出している。邪魔になった娘

を追い出し、家を我がものとしようという魂胆からである。こうしたケースは、現実にも起こりえたことかもしれないが、問題はその後、娘の両手を切断して放逐していることにある。継母にしても、なぜ、ここまでしなければならなかったのか、理由は述べられていない。この他の地方に伝わる物語も含めると、結婚について実子を優先したいと願う母心、継子を愛せない・憎んでしまうという女心が動機となっている事例がきわめて多いことに気づく。

④の継子型のバージョンは西洋ではむしろ少ないのであるが、筆者が分析した日本バージョンでは、85%がこれに属するなど、先に見たモチーフ構成の点でも、また手の喪失の経緯という点でも、日本のすべての類話はかなり斉一的であると言える<sup>8-a)</sup>。このことは、この物語が外来のものである可能性とともに、伝播以降の時間的経過が比較的短い可能性をも強く示唆するものである。

### 1-2-2 施物型

全国に広く流布している④のバージョンとは明らかに異なる特異な物語が、その数は少ないとはいえ、各地に点在している。まずは西欧バージョンの分類⑥「施物型」に近いものをみてみよう。

⑥-1 鹿児島県薩摩郡に伝わる「手なし娘」では、托鉢僧がやってきても継母は何も与えようとしないが、主人公は仕事の手を休めて、お米を与える。父親が帰宅すると、継母は継子のことを悪し様に言いつけ、「家の物さえ持ち出すこの手を切つてやる」と叫んで、両手を切つて家から出してしまう。娘は放浪の末に庄屋の息子と結婚し、男子を出産するが、手紙の改竄があつて婚家を出る羽目に陥る。母子が家を出るとき、姑は子どもに握り飯を三つ持たせてやるが、子どもはこれを宵の明星、夜中の明星、明けの明星にくれてしまう。やがてこの明星が人の形となって主人公を井戸に導き、冒頭の托鉢僧が手の再生の奇蹟を起こしている<sup>9)</sup>。

⑥-2 沖縄県八重山郡のバージョンでは、主人

公は、死んだ母親の墓参もしない父親に呆れて、亡母のためにご飯を炊いて、おにぎりを墓前に供える。継母はお釜のご飯粒を見つけて、父親に告げ口し、娘を殺すように詰め寄る。父親の依頼を受けた人は、娘の片腕だけ切り落として立ち去る<sup>10)</sup>。

### 1-2-3 その他の類似型や独自型

西洋にみられた①の近親相姦型、②の悪魔型や③の信仰型、あるいは⑦の婿による嫉妬型は、日本では全くみられない。西洋の分類⑤に比較的似ている姑=嫁関係（岡山県阿哲郡・鳥根県邑智郡・山形県新庄市）あるいは兄嫁=妹関係（奄美諸島・種子島・壱岐・香川県丸亀市）に起因するものが、それぞれ若干例ある。

また、これらとは別に、日本独自のものといえるバージョンが若干例ある。盗みをはたらいたとか不義の子を産んだ罰として腕が切り落とされる話（宮崎県西都市・鹿児島県・愛媛県）や、山の奥から出てきた鬼に片手を取られる話（埼玉県上尾市）、隣家の娘に嫉妬されて斬りつけられ、その傷がもとで両手をなくす話（宮城県本吉郡）は、日本独特のバージョンといって良いかもしれない。

独自型-1 宮崎県西都市の「手なし娘」は、生まれた子に飲ませる乳が出ないので、よそ様の蜜柑を盗み食いして捕まり、片腕を切り落とされ、それでも泣く子に耐えられず、また蜜柑を盗んで捕えられ、もう一方の腕を切られてしまう。主人公の苦難の旅がこうして始まり、渡河中に奇蹟が起きて手が元どおりになる。

独自型-2 鹿児島県大島郡喜界島に伝わる物語では、父親が実娘と後妻とを残して旅に出る。継母はそのあいだに猫を殺して炉に埋めておき、夫が帰宅したところで、娘が不義の子を産んだとって猫の骨を見せる。夫の止めるのも振り切つて、継母は継子の片腕を切つて家から放逐する。

独自型-3 鹿児島県の沖の永良部島本島に伝

わる話でも、継母が娘に鼠を捕らせ、これを裂いて火に炙り、長びつに入れて取っておく。夫が帰宅したところで、これを娘の産んだ子だとして見せる。すると父親は怒って娘の両手を切って家から追い立ててしまう。

独自型-4 鹿児島市に伝わる別のバージョンでは、兄嫁が子兎を殺して床下に埋めておき、妹が不義をはたらいて産んだ子の死体ように見せる。旅先から戻った兄は、これを見て怒り妹の手を切って家を追い出す。

独自型-5 愛媛県宇摩郡に伝わる話では、夫以外の若い男と通じて子どもができてしまった主人公の女性が、子を背負わされて山に連れて行かれ、そこで腕を切られている。不義に対する処罰は夫によってなされている。

独自型-6 埼玉県上尾市に伝わる話では、継母にいびられた主人公が、穴のあいた袋を持たされて栗拾いに行くが、いつまでも袋を一杯にすることができず、夕暮れを迎えてしまう。日暮れて山奥から鬼が出てきて、娘の片腕を取ってしまった。主人公は、帰るに帰れず、ある庄屋の厄介になり、やがてそこの息子の嫁になるという筋書きである。継子を苛め抜く継母の姿と山奥に棲むという鬼のイメージが一体化した物語である。

独自型-7 宮城県本吉郡に伝わる民話では、お雪という主人公が、隣の娘に斬りつけられ、その傷がもとで両手を無くしてしまう。隣の娘は、お雪があまりに男性にもてるものだから、前々から妬んでおり、夜道で出会いがしらに小刀で斬りつけ、お雪はその傷がもとで重い病気になり、両手を切り落とさなければならなくなったという次第。お雪は、しかし、隣の娘をちっとも恨まず、やがてある若者と結婚し男の子をもうける。

独自型-1は盗みに対する刑罰として、両手の切断がなされている。2～5までの昔話は、結婚前の若い女性がある男性と性的な関係を持ち、父

親のわからない子を産んだ場合の、家父長による処置を背景としている。独自型-6は④継子型の変形であるが、山岳信仰との関連も見られて興味深い。独自型-7は、隣家の娘による嫉妬が原因である。もちろん、いずれのバージョンでも主人公にとっては濡れ衣にすぎないのだが、父や兄による身体切除という厳しい処罰を免れることはできなかった。

鹿児島県には、見られるように「手なし娘」に関するまとまった伝承があるが、これら一連のバージョンでは、性的な逸脱ないしはその嫌疑に対する処罰として、両手ないし片腕の切断がおこなわれている。いずれも継母あるいは兄嫁による陰險な策謀にほかならないのだが、夫=父=兄は妻=継母=兄嫁の言うがままに実の娘ないし妹の手を切り、あるいは夫の制止を振り切って後妻=継母が主人公の手を切っている。結婚前の純潔や処女性を尊重し、それに反する行為を厳しく咎めようとする物語に、カトリック的戒律の影響を見ることがもできる。少数派に属する独自型の話が採録された地域をみると、南九州と愛媛に偏在し、かつ埼玉と宮城に点在していることがわかる。

### 1-3 婚家を追い立てられたわけ

生家を追われた主人公が、結婚することで得た婚家先での安らぎは、束の間のことであった。主人公の次なる旅は、乳飲み子を抱えての、絶望的なまでに困難なものであった。

1-3-1 青森県の三戸に伝わる「手つきり姉さま」は次のようなストーリーである。京都のような大きな町の大店の内儀におさまった手なし娘は、夫が神戸などの西国に商用で出かけている間に、娘は男児を出産し、そのことを知らせる手紙を若者に持たせ、夫のもとに遣わした。途中、若者は娘の実家に立ち寄って、娘の近況を伝えたものだから、継母は嫉妬心から手紙を「鬼か猿のような子が産まれた、捨てようか」と書き替えてしまう。その手紙を見た夫は、それでも大切に育てよと書いて若者に託すが、若者は帰途に再び娘の



実家に寄ったため、手紙は「親子ともども捨ててしまえ」と書き替えられてしまう。

夫の両親は悲しく思ったが、しかたなく嫁と孫を家から追い出す。

1-3-2 長崎県有明町で採録された話を紹介してみよう。

娘は物乞いをし、施しを受けながら各地をさすらい、ある分限者<sup>11)</sup>の家で桃の実を盗み食いしていたところを、そこの息子に見つかり、やがて惚れられて嫁に迎えられる。

夫が江戸詰めになった留守中に、手なし娘は花のような可愛らしい女の子を出産し、手紙で知らせる。江戸に向かう状持ちが途中、主人公の継母の家に泊まったところ、手紙はすり替えられ、「軽石面にしゃもじをうったつけたような子」が生まれたとされる。それでも夫は「俺が帰ってくるまでは大事にして育ててくりい」と返事をするが、それもすり替えられて「どんなきれいな花のような子じゃっても、お前はその子を背負うて家を出て行け」とされてしまった。

1-3-3 長崎県下県郡厳原町に伝わる話では、猿待の妻となったお清が妊娠したところで、猿待は商用の旅に出る。玉のような男児を出産したお清は、夫のもとへ知らせをもたせた番頭を送るが、これが継母のところ立ち寄りしてしまい、継母は「子どもは片眼、片手、片足が不自由だ」と書き替えてしまった。猿待は「どんな子がでけてもいいから、帰るまでおいとけ」と返事を書くが、これも飲んべえの番頭が帰路に継母の家に立ち寄ったため、「お清が家に居るかぎり、子が居るかぎり、帰らない」と書き替えられてしまう。

店の者たちは、主人が帰らないのでは困るので、お清母子に家を出て行ってもらうしかないとの結論に達し、泣く泣く子を負わせてお清を追い出した次第。

手紙が改竄されることによって、主人公が婚家を追われる顛末は、まるで判で捺したように一様である。改竄の内容を仔細に見てみると、嫁は元

気な子どもを出産したのであるから、姑は嫁を追い出す理由などない。改竄を手がける継母は、「鬼か猿のような面相の子」、「軽石面にしゃもじをうったつけたような子」、「痘痕面の不器量な子」、「片眼・片手・片足が不自由な子」が産まれたなど、赤子の身体的不具合を論じている。これに対して、赤子の父親はどんな子でも育てるとの気概を示す手紙を書き送っているが、継母はこれをも改竄し、所期の目的を果たす。ここには、前近代社会における美醜感や身体的障害に対する抜きがたい偏見が垣間見られる。

また、手紙の改竄が主要なテーマとなっている物語を種々みてみると、そこには文字文化への懐疑心が根強く存在することがみてとれる。男児出産の知らせが口頭であれば間違いや誤解の生じようはずもなかったのに、書状や親書、密書の形をとったために改竄やすり替えがおこなわれ、不幸の発端となってしまったのである<sup>12)</sup>。

#### 1-4 奇跡はどのように起きたか

1-4-1 長崎県有明町で採録された話では、主人公の母子は、義父母に同情され金を持たされて家から送り出されるが、やがて金を使い果たして、再び浮浪の民に身をやつす。とある小川を渡るところで、手なし娘は川上から流れてきたきれいな花を掬い揚げようとしたところ、それは花ではなく、かつて継母に切り落とされた自分の手であった。両の手は手首にびたっとくっついたということである。これは信心深い娘を哀れんで弘法大師が起こした奇跡であるとされる。

夫は江戸から戻り、事情を知って妻子を探索する旅にでかけ、苦勞の末に再会を果たす。

1-4-2 長崎県下県郡厳原町に伝わる話(④-3)では、主人公のお清は必死に観音さまに拝み、両手が戻れば観音さまを祭り、境内に茶店を開くことを誓う。ある川べりで水を飲もうとして身を屈めたところ、子どもが水に落ちてしまった。無い手を思わず伸ばしたところ、両手がついていた。お清は誓いどおり茶店を開いて子どもと一緒に暮らしていた。

夫の猿待は、帰阪してから事情を知り、あちこち捜し回り、やっとの思いで妻子と再会し、誤解を解いてともに帰宅してから、幸せに暮らしたということである。

1-4-3 京都の丹波地方に伝わる物語では、手の無い主人公が生まれてきた赤ん坊を育てきれないと思い、川に捨てて自分も死のうとする。そんなとき赤ん坊が母親に向かってにっこりと愛らしく笑うので、手なし娘の決断は鈍る。それでもエイヤッと水面に落とすと、赤ん坊はやはり笑顔を母親に向ける。主人公はこれをみて後悔し、水に沈んでいく赤ん坊を救い上げようと、とっさに手の無い腕を伸ばすと、手が生えて助け上げることができたという次第である（稲田浩二『日本民話 京・大和・近江の昔』講談社）。

主人公の心の痛手がいかに深かったかは、主人公が子どもとともに心中をしようとして川や池に身を投げているバージョンがあったことから、うかがい知れる。そこまでいかないまでも、主人公が水に落ちた子どもを自分の意志では救おうとしないバージョンもあった。子どもが水のなかにずり落ちたのに、彼女は自ら飛び込んで、なりふり構わず救おうとはしていない。彼女は絶望して泣き叫び、ただあたりをかけまわっていただけである。主人公の心はもはや自発的に何かをする状態にはなかったと言える。

それゆえ、老人が「はやく子どもを救いなさい」と言っても、彼女は「私には手がないのです」と言うばかりであった。それでも老人が「子どもを救いなさい」と再度強く命じると、主人公はやっと腕を水のなかに突っ込み、ここで奇跡が起きたわけである。絶望に閉じこもっていた彼女は、老人に命じられて初めて、溺れるわが子を救出しようとしている<sup>13)</sup>。

この他に、救けた魚による報恩として奇跡が起こされる（香川県丸亀市）など、アニミズム的、土俗的信仰が背景にみられるものもあった。また、どこからか右の手首がきてくつつく（島根県邑智郡）、妹から切りとられた手が娘にくつつけ

られる（兵庫県水上郡）というバージョンもあるが、これらはいずれも単発的な事例である。

1-4-4 青森県の三戸に伝わる「手つきり姉さま」では、家から追い出された娘はあてどもなく歩き、お堂の神様に手の再生を祈る。途中で出会った六部が、

「かまわずに真直ぐに歩いて行けば、びっくりする時があって、そのときに手が再生する」と教える。母子が歩いて行くと、やがて大きな岩が立ちのぼる所に出る。手なし娘は川べりに降り、喉の渇きをいやそうと川面に身を屈めると、子どもが川へ落ちてしまう。びっくりして取り押さえようと、精一杯の力を両腕にこめると、そのはずみで両手がびょうっと出てきて、子どもを取り押さえることができた。神による救いをえた母子は、喜びに包まれて先へ行くと、また六部に出会い、その指示で寺に辿り着き、そこの和尚の世話になることができた。

一方商用を済ませて帰宅した夫は、事情を聞き妻の継母の悪事を知って、妻子の探索に出る。二、三年も探し回って、六部に出会い、どこぞの寺に行ってみるようにならわれ、やっとのことで親子再会を果たす。継母は悪事のゆえに盲目になってしまったとのことである。

両手の再生という奇跡は、びっくりして両腕の付け根の筋肉に力を込めたときに起きているが、それは六部<sup>14)</sup>による指示と神の加護によってもたらされたという形をとっている。

## 2 生家を後にした女主人公を救ったもの

手なし娘は、ふつうならどこかで生命を断ってしまいたくなるほどの、困難な境涯に陥った。彼女は、血みどろになって森や山地、荒野を彷徨し、むしろそうした自然のなかで孤立無援の己れの状況を深く認識している。ユンクの弟子フォン・フランツは、

「たいていの女性は人間関係のなかにある生に強く依存し、関係を必要としているので、自

分が孤独であることを認め、これを与えられた状況として受け入れることは、彼女たちにとってきわめてつらいことだ」

と述べている<sup>15)</sup>。女性は一般に孤独に弱いということであろうか、「一匹狼」という言葉は、たいていの場合、男性に使われている。

しかし、しばしの間であれ、森のなかや山のなかで生きたことで、主人公は「自分の内奥の本性へ沈潜して、この本性がどんなものであるかを」感じ取る。さらにフランスによれば、自然はそれ自体の美しさによって、人間の心の傷を治癒する力をもっているとされる。現代において、自然とのふれあいの中で、心身の健康を回復する治療法が行なわれていることを考えると、納得のできる議論ではないかと思われる。このメルヘンの主人公もまた、あるバージョンではそうした森や山地で、野性の動物による癒しを受けて、生きる活力を回復し人里に立ち現われている。

主人公はまた、自分を裏切った家族よりも、世間の人々の温情に期待を寄せている。ハンディキャップがあっても健気に生きていけば、人の情けにすがり神の加護に恵まれて、それなりの幸せを得られるものであることを、この物語の前半のストーリーは教えてくれている。世間には心やさしい人々がたくさんいるもので、家族に絶望したら、世間に助けを求めよという教えも込められているのであろう。手なし娘は、心の寛い青年と出会い、いったんはあきらめていた結婚生活というもの、人並みの生活というものを手に入れることになった次第。

## 2-1 婚家を追われて避難するところは

手を失った女性に救いの手を差し伸べてくれたのは、同年輩の異性、心が寛く力のある男性であった。ひよんなことから得られた幸せに、子どもを出産するという、女性にとって最も幸せな体験が加わりさえする。しかし、主人公の人生は、ここで暗転する。奈落の底に突き落とされるというのは、こういうことを言うのであろう。改竄された手紙によって、彼女は婚家を後にすることになる。この度もまた、生家の継母が彼女の幸福を

嫉妬して、彼女を追い詰めていったのである。女性にとっては同性こそ油断のならない存在であることを、この物語の中盤のストーリーが示唆している。

第二の旅は乳飲み子を連れた、より困難な旅となった。それは、幸運をつかんだはずの女性の、運命に弄ばれた挙げ句の果ての、不本意な旅立ちであり、はじめから苦難の連続が予測できるものであった。不自由な身体で乳飲み子に乳を与え、飢えをしのぎ渴きをいやしながらの旅路であった。それでも主人公が、夫や義母の裏切りに絶望することなく旅をつづけられたのは、子どもの生育への責任や喜びと楽しみ、子どもの笑顔によって与えられる癒しのせいであったかもしれない。それに、心のどこかには、夫の改心をかすかに期待する気持ちがあったのかもしれない。

婚家から追い出された彼女に、もはや住まうべき家はない。「女三界に家なし」とはよく言ったものである。周囲の人々によって突き放された主人公は、子どもとともに、またしても自然のなかに逃げ込む。飢えと渴きに苛まれて放浪する主人公に、しかし、自然はもはやなんの救いにもならない。あまりにも深く抉られた心の傷口は、人間にやさしいはずの自然のなかでも容易にふさがることがなかったのである。

第二の旅の途上、主人公は、寺社に避難所を求めている。主人公の心の傷は深く深く抉られていたので、もはや心の病を癒せるものは神仏をおいてほかにないということである。こうした窮状から女性を救出できるのは、もはや深い宗教的体験をおいてほかに無いということであろうか。

上に見た各種のバージョンでは六部、法印や虚無僧、あるいは弘法大師、千手観音、地藏などが、神仏またはその使いとして、主人公に真の救いをもたらしたのであった。

それにしても神に祈るための両手が失われてしまっているのであるから、信仰の道も険しいものがあつたと想像できる。主人公は身体上のハンディキャップをのりこえて信心深い気持ちを失わなかったからこそ、神仏の加護が得られたのであろう。神仏だけは人間を裏切らないというメッ

セージが、ここに読み取れる。

## 2-2 夫の二度の旅

夫もまた二度の旅に出る。最初の旅は、手なし娘を妻に迎えて間もないうちであり、バージョンによって異なるが、公用や商用のための旅であった。留守をあずかる母や妻子の身を案じながらも、これは一人前の男として果たさなければならぬ、やむをえざる旅であった。夫と留守宅を結ぶ唯一の頼みの綱は、緊急の際に交わされる手紙であり、夫は母親や妻との手紙のやり取りによって、意志の疎通ができていと信じて、長期の旅をつづけたのである。

夫の二度目の旅は、予期もしなかった妻子探索の旅となった。心やさしい夫は、妻子が味わっているであろう苦難を我が身にも課するかのよう、断食しながらの旅をつづける。7年間も飲まず食わずという表現はもちろん誇張であり、この旅がいかに艱難辛苦に満ちたものであったかを、聞くものに訴えようとするものである。苦勞のかいあって妻子との再会を果たした夫は、誤解を解き、ともども家に戻って幸せな家庭生活をおくったという次第である。

迎えにきた夫と連れ立って家に戻った主人公は、しかし、究極のところ、再び世間の荒波のなかに引き戻されただけではなかったのか。主人公は、自分のためではなく、生育途上の息子のために戻ったのかもしれない。子どもを育てるためには父親がいなければ困ることが沢山あるし、何よりも経済的に夫に依存して生きていかなければならない世の中であれば、主人公の選択はやむをえないものであったのかもしれない。どんな苦勞にも耐えていく、そんな決意を抱いて、彼女は決して軽くはない足取りで、婚家に引き戻されていったのであった。

日本バージョンの「手なし娘」のエンディングは、ほとんど全てこうした結末であり、女主人公の人生は、徹頭徹尾、自己犠牲に貫かれていることが前提となっている。

これに対して、「高野山女人堂由来記」の最後では、女主人公は出家して尼となり、夫も奥の院

にのぼって木食上人<sup>16)</sup>となり、息子もまた高野山の寺の一つの上人となる、というものであった。周囲に振り回されっぱなしの主人公に、安寧の日々をもたらしたのは、俗世間に戻るのではなく、信仰に身を捧げる日々である、との確信に満ちた結末である。こうしたエンディングは、読む者や聴く者に救いを感じさせてくれるものであったにちがいない。弘法大師信仰と相俟って、この「由来記」の話は広く流布したようである。

## 3 手の再生の奇蹟について考える

日本に伝わる「手なし娘」のバージョンを種々見てきたが、つぎに、奇蹟がどのように起きているかを、主として信仰とのからみで検討してみよう。

### 3-1 奇蹟はどのように起きているか

失われた両手が蘇るという奇蹟が起きた経緯は、日本のバージョンでは比較的多様であるが<sup>17)</sup>、これを数の多い順に並べてみると、次のようになる。

両手再生の奇蹟が起きるのは

- ① 水に落ちそうになる子を助けようとして。
- ② 神、観音、地藏、弘法大師、寺の和尚、白髪の老人、爺、婆、高野山詣で、四国巡礼、伊勢参宮、善光寺参り、守本尊、亡母のおかげ。
- ③ 腕の切断面が水に触れて。
- ④ 手が川上から流れてきて。
- ⑤ 魚を助けて……、熊に助けられて……。
- ⑥ 妹の手が切られて、娘の手首に付け替えられる。地藏の手が、娘の手首に付け替えられる。
- ⑦ いつのまにか、不思議なことに。

①、③、④が水にかかわるもので、これに②の神仏、僧侶らがからむ形で奇蹟が起き、主人公の両手の再生が成就している。

### 3-2 根底にある清水信仰とアニミズム

両手再生の奇蹟は、たいていの場合、手首や腕の傷口が水に触れたとたんに起きているが、これらを少し具体的に、各地に伝わる種々のバージョ

ンに即して概観してみよう。

型にはまった多くのストーリー展開は、主人公が泉や川で水を飲もうとして、あるいは川で洗濯をしているときに、背負っていた子どもが水中に落ちそうになり、あるいは落ちてしまい、必死の思いで無い手を差し出したところ、両手をはえてきたというものである（福岡県旧企救郡、徳島県『炉端できた昔』、広島県比婆郡など多数）。さらに手なし娘が、川の水（長崎県南高来郡）や井戸水（新潟県佐渡郡）、塩水（香川県丸亀市）に触れたとき、あるいは死のうとして川に入る（兵庫県三方郡）か、池に身を投げたとたん（徳島県海部郡）や池に飛び込んだとき（長崎県下県郡）に奇跡が起きている（付表・地図に◇印で表示）。

このほかに、主人公が、白髪の老人の川に落ちた煙草入れを取ってあげようとして（鹿児島県大島郡喜界島）、あるいは川上から流れてきた「さで袋（魚を捕るさで網か）」を掬いあげようとする（鹿児島県沖永良部島）か、花を掬いとろうとした（鹿児島県鹿児島市、曾於郡および長崎県有明町）、その瞬間に奇跡が起きている。川上から手が流れてきて娘の手首にくっつくというバージョン（鳥根県邑智郡）もある。こうしたバージョンの背景には、清浄な水に対する信仰心が垣間見られる。

天から降った雨が地中に沁み込んで、長い年月を地下水脈となって流れ、土中のミネラル分を多量に含んで、濾過されて純度の高い水となって湧き出すところでは、清水への信仰がみられる。こうした水には、純粹に衛生上の問題として、病原菌や汚れを洗いおとす力がある。そこから、清水には眼病や皮膚病をはじめとする種々の病気を治癒する力があると信じられてきた<sup>18)</sup>。

日本には古来、石神井・石神、岩神などの地名がたくさんある。こうした土地には、治癒力をもった水への信仰があった。さらに石清水という地名も多い。こうした土地の自然湧水は、ミネラル分を多く含んでいたり磁気を帯びていたりして、薬効があったのかもしれない。また、泉にまつわる伝説は日本の各地にも広く分布している。

弘法大師が諸国を巡っているうちに、水がなくて困っている地方にやってきて、杖で地面を突いて泉の在りかを教えたとか、水を一杯求めたところ、遠くまで行って水を汲んできたので、お礼に杖を地面に突き立てて水が出るようにしてあげたといった、たぐいの話である。人々はこうした泉を弘法水と呼んでありがたがっている。

また、両手を切り落とされた主人公が、自然界の力によって治癒され、あるいは両手再生の奇跡を体験する事例がある（付表・地図に▼で表示）。主人公が腕を切り落とされて山の中、森の中に置き去りにされ、そこで熊に出会い傷口を舐ってもらって治癒する例（香川県・鳥取県・和歌山県・三重県）、山奥の滝の傍に住み（愛媛県）、あるいは木の根元に座っていた時（鹿児島県）に、奇跡が起きている事例がある。明けの明星や宵の明星といった天体に捧げ物をしたり（鹿児島）、打ち上げられた魚を助けたり（香川県）することが契機となって、両手が蘇ったケースもある。

### 3-3 キリスト教に取って代った神仏信仰

清水信仰が神仏信仰と結びつく形で明示的に行われているケースもある。弘法大師や六部、僧侶らが、主人公に川や池、沼に行くように指示し、あるいは、所神に詣でたおかげとか、僧侶から手首を水に浸すように言われ、そうしてみたところ手が生えてきたというものである（岩手県九戸郡、栃木県塩谷郡）。

広い意味での仏教や神道の神々によって奇跡が起こされたとするバージョンは、多数にのぼる。弘法大師による奇跡（付表・地図に★印で表示）を伝える話は、鹿児島県・長崎県、愛媛・徳島・香川の四国三県および鳥取・岡山・兵庫の三県、岐阜、栃木、山梨に分布している。このうち四国の香川、徳島と岐阜県のバージョンでは、四国巡礼が大師信仰と結びついてあらわれている。また、物語のなかに「白髪の老人」として登場し、奇跡を起こしているのは、弘法大師の化身とされている。

他方、観音・千手観音による奇跡（●印で表示）

が起きたとする話は、佐賀・長崎・徳島・島根・広島・兵庫、それに岩手・宮城・山形・福島の東北四県に分布している。この物語における千手観音への信仰は、そのたくさんの手が慈悲による救済を象徴しているところからする連想であろうかと思われる。福島県の民話に出てくる浅草の観音さまは、江戸時代に徳川将軍家の祈願所とされ、庶民信仰の中心地となったところである。また、「婆」など古老の姿をとった神的な者による奇跡譚があり、老婆が観音の化身と言い換えられている事例もある。

さらに新潟県には、地蔵による奇跡（▲印で表示）の話が二つ伝わっている。お地蔵さまは、平安中期から左手に宝珠、右手に錫杖をもつ姿で親しまれていた。鎌倉時代以降は、子供を守護、救済するものとして、子安地蔵、子育て地蔵の名で民間信仰にも取り入れられてきた。この物語では、水を飲もうとして子どもが落ちそうになり、取り押さえようとした時に手が再生しているが、そばの地蔵像の手がとれていたということである（新潟県見附市、長岡市）。また、長崎県下県郡に伝わる別のバージョンでは、継母が主人公の生き肝を取ろうとし、父親は娘を不憫に思い、いつそのこと殺してしまおうとして山中に連れ出す。しかし殺しきれずに両手だけを切り落として立ち去っている。主人公は信仰している地蔵の教えにしたがったので、手が生えたとある。

このほかに、明神・所神・天神など、神社神道系の信仰によるものや神仏習合神としての八幡信仰によるものが、静岡県と岩手県にみられた（△印で表示）。また、それと明示はできないけれども、神仏による加護のゆえに奇跡が生じたとするケース、たとえば、寺に泊まって（鹿児島県大島郡沖永良部島）、神に祈願して（岐阜県大野郡）、守本尊のおかげ（宮城県本吉郡）、和尚・六部に言われて（山梨県西八代郡）などがある。また、故人の力とするものや灯明を点している家そのものが奇跡の原動力とされる事例もみられる。こうした例は、いずれも孤立してあらわれているが、信仰にかかわる奇跡譚でもあるので、おしなべて付表・地図上に○印で表示した。

### 3-4 付表と地図から読み取れること

民話の背景になっている弘法大師信仰と観音信仰、地蔵信仰などの地域的な差異が、地図の上にはかなりはっきりと表れている。新潟・福島以北の東北地方は観音信仰による奇跡物語圏、九州・四国・中国地方は、大師信仰による奇跡物語圏と言える。地蔵信仰は長崎・新潟の二県にしか見られない。

アニミズム的な内容の奇跡物語は、鹿児島・愛媛・香川・鳥取・和歌山・三重・埼玉にあり、神道系のバージョンは静岡・岩手の二県に見られ、双方を合わせると一本の細い線＝伝播経路が描ける。

印が四つ書き込まれているのは、鹿児島と長崎、愛媛と香川、岩手の五県である。長崎には清水信仰のほか、弘法大師による奇跡、観音による奇跡、地蔵による奇跡の物語があり、他方、鹿児島には清水信仰のほか、弘法大師・アニミズム・一般的神仏による奇跡譚がある。四国二県の組み合わせは鹿児島と同一であり、民話の終着駅の名に相応しい岩手には多彩な伝承例があり、しかも独特な組み合わせである。

## 4 メルヘンは誰がどこに持ち込んだのか

### 4-1 鹿児島か長崎か

周知のとおり、ザビエルは1549年、アンジロウら3人の日本人信者による案内で鹿児島に入り宣教活動を開始している。スペイン人はもとより、ポルトガル商人やイタリア出身の航海士などもこの地に上陸したので、鹿児島が西欧文化の最初の窓口であったことは疑いのない事実である<sup>19)</sup>。すでに1-2-3でみたように、この地には「手なし娘」のまとまった伝承、しかも全国バージョンとはかなり異なった質のそれが見出されている。

鹿児島の沖永良部島のバージョンでは、主人公は鼠を捕らされ、継母がそれを火に炙って赤裸にし、娘の生んだ胎児に見せかけ、父親に娘の手を切断させている。それが子兎や猫になっているバージョンも鹿児島にだけみられた（鹿児島市、

大島郡字検村、同喜界島)。スペインの民話には男児出生の手紙を「二匹の鼠が生まれた」と改竄するバージョンがある—エスピノーサ編(三原幸久編訳)『スペイン民話集』岩波書店、1989—が、こうした符合は単なる偶然であろうか。

九州南部には、また、主人公が不義(鹿児島県)や盗み(宮崎県)をはたらいたという濡れ衣を被せられて、手を切断されるバージョンがあった。ここに、キリスト教的ないしはカトリック的倫理観が影響していると考え、牽強附会の説をなすことになるであろうか。

ポルトガルやスペイン、フランスやイタリア出身のイエズス会宣教師が、通詞をとおして、信者に奇蹟譚を話して聞かせた可能性は大いにある。こうして最初に鹿児島に伝えられた物語は、後の薩摩藩の交易圏であり勢力圏でもあった沖永良部島や喜界島、さらには沖縄諸島にいたるまでの島嶼部に広められ、そこで特殊な変容を遂げたと考えられる。これらは、地理的な理由から、狭い範囲にとどまり、全国に流布したバージョンのような、江戸期の信仰と結びつくことが少なかったであろうと推定できる。

信仰と交易の中心は、間もなく平戸、長崎へと移っていった。江戸時代の長崎は南蛮文化の流入口であり、また日本各地から蘭学の研究を志した人たちが集まってもいたから、諸文化が各方面に向けて発信された土地でもあった。想像をたくましくすれば、イエズス会によるキリスト教宣教の過程で、聖職者によってキリスト教の奇蹟譚として、まずは九州各地の人々に語られ、やがて日本各地に広められたのかもしれない。あるいはもう少し後の時代であれば、イギリス人やオランダ人によって伝えられた可能性もある。これら西欧人によってもたらされた民話が、商人や船乗り、あるいは蘭学者たちによって各地に運ばれ、漸次日本国内に広められたとも考えられる。

禁教令が出されたあとでは、物語の舞台背景の変容や、登場人物の置き換えが進められる。さらに、江戸時代を通じて、各地に到達した物語は、それぞれの地域に固有な素材に置き換えられ、枝葉末節の部分で種々の変容を蒙り、かくして現在

のような形になったものと推定できる。なお、「手なし娘」の物語は、その後、芝居じたてになって各地の祭礼の折りに演じられ、広まっていったとも考えられている。

#### 4-2 仮説的見通し

以上の論説から、日本各地に伝播・流布した「手なし娘」の物語の発信源は長崎ではないかとの推測が成り立つ。もちろんこの推測には、いまだ少し裏づけが必要である。

日本のような閉ざされた文化圏では、せいぜい枝葉末節の部分でのみ種々違いは出てくるものの、ストーリーや主要なモチーフに大きな変容はなかなか見られないものである。それでも、前節で見た奇蹟譚の分析の結果、両手の再生という奇蹟を起こした神々には、弘法大師・千手観音・地蔵の仏教系列と、所神・山神など神道=自然神信仰系列があった。九州・四国・中国地方には弘法大師による奇蹟譚が多く、北日本には観音によるそれが多く、中間地域には双方が混在していることがわかる。地蔵信仰は二県にしかないが、その一例が長崎県にある。長崎県にはこれら三つの奇蹟譚のすべてが伝えられていることも判明した。

異なったバージョンを生み出す原動力は、一般に伝統的な宗教や文化、価値観や習俗の衝突によるものと考えられている。A. H. クラッペの論説<sup>20)</sup>によれば、類話の多くが揃っている地域こそ、その物語のルーツである可能性が高いという。同一の物語の、種々のバージョンが豊富に存在する地方こそ、その物語が誕生したところと言えるのである。あるいはそれが外国生まれの物語である場合には、そうした地域こそ、その物語が最初に持ち込まれたところと言えそうである。

鹿児島と長崎は、外来文化の流入口であり、かつまた日本在来の神仏信仰とキリスト教との最初の衝突と葛藤の場であったことを想起することは、ここでは価値のあることだと思われる。クラッペの論説をベースに考えてみれば、「手なし娘」の物語は16世紀中ごろ以降のある時期に、西欧から鹿児島、平戸、長崎へと順次に伝えられ、

鹿兒島発のものは、南は沖縄、東は四国まで海づたいに伝播し、他方長崎発のものは、四国巡礼・弘法大師信仰・観音信仰と結びつき、広く本州北端にまで到達した。このような仮説が成り立つという次第である<sup>21)</sup>。

### 補遺—「高野山女人堂由来記」について

「高野山女人堂由来記」(『旅と伝説』9の5、通巻101号、1936年)という古写本がある。これは明治2年に、右手村木地山の小椋萬次郎篤知なる者が美濃紙21葉に筆写したものである。中山太郎が、入手した一束の古写本中に見出したもので、句読点を加えつつ全文を紹介している。内容は鳥取県東伯郡に伝わるバージョンとよく似ている。同じルーツから出た物語が、一方は江戸期に流行した高野山=弘法大師信仰の物語となり、江戸末期に書き留められた。他方は、江戸期はもとより明治・大正期をとおしてずっと口頭伝承されてきたものである。

両者を比較してみると、いろいろな違いのあることがわかる。たとえば、鳥取バージョンでは「鬼とも蛇ともつかぬものは、小杉に背負わせて追い出せ」とある部分が、「女人堂由来記」では「小杉の先祖、殊の外ただしからず、片岡家のけがれ」となっている。また奇蹟は、前者では水中に落ちた子供を必死の思いで救いあげようとしたときに起きているが、後者では「37日のあいだ御加持の水にはまった」<sup>22)</sup>結果起きている。

「女人堂」のほうは、いちいち理屈っぽい。中山は、「女人堂由来記」に「手無し継子物語の退化形式」という副題をつけている。それは、たとえば、両腕の再生の場面で、ほとんど全てのバージョンでは、両腕は一瞬にして甦っているのに、「女人堂」では両腕の切断面が腫瘍のように盛り上がってきて、ついで何日かして赤ちゃんの腕くらいにまで成長し、さらに最終的にちゃんとした大人の腕の長さ、太さにまでもどったと描写されている。こんなところが、民話=昔話らしからぬところだとされている。さらに、主人公の家族がそれぞれ僧籍にはいるという結末の部分や、彼ら

が実在のお堂や寺の由来に深くかかわったというくだりにも、もはや伝承説話とは異なった後世の作為を感じずにはいられないと、中山は判断している。

また、この物語では、主人公の小杉が高野山の女人禁制を解く、一つの切っ掛けを作った人物として描きだされている。民間説話がある特定の宗派の宗教説話に換えられるケースは、いくらでも存在するが、中山が「退化形式」と言うのは、「女人堂由来記」がまさにそうした典型的事例にあてはまるからにはほかならない。

\*高野山は真言宗の総本山金剛峰寺がある霊場として有名なところである。高野山にはかつて7700余の僧坊があり、開創以来1000年のあいだ女人禁制の山であった。女性は男性修業者の心を乱すとの理由から、入山が禁じられていたのである。しかし、高野聖の活動もあって全国に弘法大師信仰、高野山信仰が普及するにつれて、女性の信者も増え、参詣を希望するものも急増した。このため、大坂街道など金剛峰寺にいたる七つの登山路の入り口に女人堂が建設され、そこまでは女性の修行者も行けるようにしたという。その後、明治初年(1872年)になってから女性の入山が認められるようになった。女人禁制時代の名残として、不動坂入り口に女人堂がただ一ついまなお存在している。1998年の晩夏、筆者は難波から南海電気鉄道に乗って高野山を訪れ、女人堂を実際に見、女人道を歩いてみた。女人禁制の時代、女性は奥の院にいたる道のはるか手前の山門から上に進み入ることができなかった。山道を登ってきた女性たちは、女人堂から修業の場を仰ぎ見て両手を合わせたということである。

### 注

- 1) 中山太郎「高野山女人堂由来記」『旅と伝説』通巻 101号、1936
- 2) 松原秀一『中世の説話 東と西の出会い』東書選書(1979)所収。
- 3) 三原幸久「民間説話の比較二(日本とヨーロッパ) 昔話<手なし娘>の伝承と伝播」福



- 田晃編『民間説話 日本の伝承世界』世界思想社（1989）所収。
- 4) 拙著『メルヘンの社会情報学』近代文芸社、2006. の第九章は、西洋のメルヘン「手なし娘」を歴史的コンテクストのなかに位置づけて、そのシンボリックな側面を分析したものである。
- 5) 三原、前掲書246頁。
- 6) 古来日本では、重病人には人の生き肝や胆が特效薬であると考えられてきた。平安時代末期の『今昔物語』巻二九の第二五話には、悪性の瘡のでた平貞盛が、医師の診断を仰ぎ、稚児の肝に薬効があることを聞き知り、これを求める話がでてくる。彼は息子の妻が懐妊中であるところから、胎児（彼にとっては孫）の肝をよこせと息子に言い寄るが、さすがにこれは断られる。炊事女がたまたま妊娠中であつたので、この女の腹を割いてみるが、女の子であつたので捨て去り、別に稚児の肝をもとめたという話である。貞盛が一命をとりとめたところを見ると、どこやらで稚児の肝を入手できたのであろうが、ひどい話である。
- 7) このくだりは、イタリアの『ペンタメローネ』における主人公ペンタの行動や、フランスの「ラ・マヌキヌ」のストーリー展開を彷彿とさせる。
- 8) この物語は、前半が「シンデレラ物語」の翻案である。④-6とは逆に身体の欠損により殿様との結婚は破談となっている。ここには、手へのフェティシズムが、日本的に改変されて登場している。
- 8-a) 高橋宣勝『語られざるかぐや姫—昔話と竹取物語—』（大修館書店、1996）の「外来昔話の変容」（83-96頁）によれば、南蛮文化伝来の時代に、西洋版「手無し娘」の多くのバージョンが日本に伝えられ、その中で日本人の精神風土にマッチした④の継母・継子型だけが受容され広まったのだとされる。筆者は、しかし、後段で論じているように、鹿児島以南と長崎以东では様相が異なるので、日本全体を一様に論じることはできないとの立場をとる。
- 9) これはもう、『千一夜物語』の翻案といっても間違いではないであろう。それがイスラム支配下のイベリア半島に広まり、スペインバージョンの一つとして我が国にもたらされたとも推定できる。
- 10) こちらは鹿児島バージョンほどはっきりしてはいないが、分類④の継母継子嫉妬型との混淆型と言える。
- 11) 分限者とは、金持ち、資産家のことで、自分自身は商いのことや家内のことについて諸事かまわず、手代にまかせていられるようなお大尽のことを指す。
- 12) 日本には「水の神の文使い」という、手紙の書き替えをモチーフとした運定めの昔話がある。貧しい男が、ある沼の主から他の沼の主宛てた手紙を届けるように頼まれる。手紙にはこの使いの男を食い殺せと書いてあるのだが、途中で六部がこれを見て気の毒に思い、この男に宝物を与えるようにと書き替えてくれる。こうして男は金をひる馬をもらって長者になることができた。たいていの沼や池には、こうした伝説の類がつきものであるが、これは水の神への信仰を背景として成立したものといえる。また、手紙を書き替え、殺されるはずの男が、手紙を頼んだ人の娘と結婚するという話は、朝鮮・中央アジア、インド、西アジア、ヨーロッパの各地に広く分布しているということである。
- 13) この情景は、『新約聖書』のなかでイエスに「立ちなさい、歩きなさい」と促された足の萎えた人が、そうしてみた途端に歩きだせた、あのエピソードを思い出させる。主人公が動かせないと頑なに信じていた腕と手が、神の介在と生命の泉水によって動くようになった。これが奇跡というものの中身であったのではないだろうか。もしも両手が本当に切断されていたとしたら、いかなる奇跡が起ころうとも、両手の再生があるとは到底考えられない。だから、主人公の手は萎えただけ

のことで、それは最後には機能を回復したのだと考えることもできる。そうすれば、たしかにこの物語の不可思議な部分は、いくらかは解消もする。なお「手」については、拙稿「身体象徴化—前近代の西欧における聖化され象徴化された手—」『社会情報学研究』14号（2005）を参照のこと。

- 14) 六部というのは、書写した法華経を全国66箇所<sup>1</sup>の霊場に一部ずつ納める目的で、諸国の社寺を遍歴する行脚僧のことである。江戸時代には俗人もこれをおこなうなど大流行し、男女ともねずみ色の木綿の着物を着、同色の手甲、甲掛け、股引き、脚絆をつけ、死後の冥福を祈るために、鉦を叩き鈴を振り、あるいは厨子を背負って家々を乞い歩いたということである。
- 15) マリー=ルイーゼ・フォン・フランツ（秋山さと子、野村美紀子訳）『メルヘンと女性心理』海鳴社、1979
- 16) 木食とは、火のはいった食物をとらず、肉類、穀類、野菜を常食とせず、もっぱら木の実だけを食して修行することをいう。この木食戒で修行する僧侶のことを木食上人<sup>2</sup>といい、あまたいるなかで有名なのは、16世紀末の高野山の客僧・木食<sup>もくじき</sup>応<sup>おう</sup>其<sup>き</sup>なる<sup>なる</sup>者<sup>者</sup>で、彼は豊臣秀吉の援助を受けて青巖寺を再興し、その左に興山寺を建立したとされる。
- 17) ヨーロッパのバージョンでは主人公の手が蘇える奇跡は、①水の力で、②キリスト教の神・天使、聖母マリア・聖ペテロ、あるいは隠者・魔法使い・老人、さらには③森の中で、小鳥など自然界の生き物の力によって、惹き起こされている。この点では、以下に見る日本昔話における多様性が目をひく。それは日本人の信仰生活の多様性に起因しているとも考えられる。
- 18) 京都の清水寺の縁起は、その名からも推測がつくように、水と深い関係がある。奥の院の下にかかる「音羽の滝」は寺名の由来をなし、病に効くとしていまなお祈誓する人が多いということである。また、青森県青森市荒川の入内地区にある石神神社にある巨岩は、強力な磁力を帯びており、空気中の水分がこの岩の窪みに溜まり、この水が白内障で目が見えなくなった人を癒したということである。磁気を帯びた水がなにがしかの薬効を発揮したのではないかと推測されるが、当神社に尋ねたところ、現在では磁力も薄れ、効力は失せたということである。
- 19) 根占猷一『東西ルネサンスの邂逅』東信堂、1999. 第3章「南蛮伝来」77-123頁参照。ザビエルはほぼ1年間、鹿児島で布教活動をしている。
- 20) 彼によれば「オファ王の物語」は、タイプA、B、Cの類話のすべてが多数存在するビザンツ的東方世界にルーツがあるとしている。なお西欧のメルヘン「手なし娘」のルーツ捜しについては別稿「メルヘンは旅をする」を準備中である。
- 21) アジアでは日本の他に朝鮮、ミクロネシア、インドにも少数の類話があり、モンゴル族にもややまとまった伝承があるということである（鈴木俊彦編『電子ブック版 日本大百科全書』小学館、1996の「手なし娘」の項）。本書ではそこまで手を広げることはできなかったが、三原幸久は、スペインによって植民地化されたチリをはじめとしたラテン・アメリカ諸国、フィリピン、ミクロネシア諸島における「手なし娘」の類話が、宗主国スペインの影響をつよく受けていることを証明している（三原幸久編『ラテン世界の民間説話』世界思想社、1989. 「チリにおける昔話研究」p.173）。三原はそこから、日本における「手なし娘」の話も「南蛮人の渡来以後、鎖国までの間に、南蛮人によってわが国に伝えられたと考えるのが最も妥当な意見であろう」としている。とくにカトリック宣教師による物語の伝播を示唆している。
- 22) 「加持の水にはまる」とは、密教の修法の一つで仏の慈悲を感じ得すべく水垢離をおこなうことをいう。

## 参考文献一覧

- Hrsg. von Kurt Ranke, Enzyklopädie des Märchens. 1977ff.
- Hrsg. von Walter Scherf, Das Märchen Lexikon, Bd.1,2, 1995, C. H. Beck.
- A. H. Krappe, The Offa-Constancelegend. in : Anglia, 61, 3/4, 1937.
- 金田鬼一訳『グリム童話集一～五』岩波書店, 1989, 90年版
- 吉原高志・素子訳『初版グリム童話集』白水社, 1997
- マリー＝ルイーゼ・フォン・フランツ (秋山さと子, 野村美紀子訳)『メルヘンと女性心理』海鳴社, 1979
- 三原幸久「民間説話の比較二 (日本とヨーロッパ) 昔話<手なし娘>の伝承と伝播」福田晃編『民間説話 日本の伝承世界』世界思想社 (1989) 所収
- 松原秀一『中世の説話 東と西の出会い』東書選書, 1979
- 日本民話の会編『ガイドブック 世界の民話』講談社, 1992
- 小沢俊夫編著『昔話入門』ぎょうせい, 1998年版
- 関 敬吾編『日本昔話大成』第5巻本格昔話4, 角川書店, 1978
- 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』同朋舎, 1985～1998
- 日本放送協会編『日本昔話名彙』日本放送協会出版会, 1948
- 青森県三戸郡：関 敬吾『日本昔話大成』第5巻本格昔話4, 角川書店, 1978
- 青森県：能田多代子編『日本の昔話(7) 手つきり姉さま』未来社, 1958
- 宮城県：稲田浩二監修『日本の仏教民話集』東方出版, 1997
- 宮城県：佐々木徳夫編『日本の昔話(13) むがす, むがす, あっどこぬ』未来社, 1969
- 岩手県稗貫郡：関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山 日本の昔ばなし I』岩波書店, 1956
- 新潟県長岡市：水沢謙一『日本民話 雪国のおばばの昔』講談社, 1974
- 稲田浩二・和子編著『日本昔話百選』三省堂, 1971
- 三重県阿山郡：『日本の民話 近畿』ぎょうせい, 1979
- 中山太郎「高野山女人堂由来記」『旅と伝説』通101号, 1936
- 高野春女『女人堂の由来—女人哀話小杉物語—』総本山 金剛峰寺, 1994
- 京都府丹後地方：稲田浩二『日本民話 京・大和・近江の昔』講談社, 1976
- 大山地方：稲田和子『日本民話 大山をめぐる昔話』講談社, 1977
- 鳥取県関金町および徳島県川上：武田正『日本民話 炉端できいた昔』講談社, 1974
- 香川県丸亀市：武田明編『日本の民話 讃岐・伊予篇』未来社, 1975
- 長崎県下県郡：『日本民話・九州(1)』ぎょうせい, 1979
- 鹿児島県：有馬英子編『手無し娘—鹿児島県の昔話—』桜楓社, 1975

これ以上の出典の詳細は別稿にゆずる。

付表 奇跡が起こった状況

各種バージョン採話地	両手再生の奇跡は、どのような状況で起きているか	地図中の記号と物語中の指示・暗示語
沖縄県国頭郡	川に落としてしまった子を助け上げてみると、手が蘇えていた	◇
八重山郡	川に落ちそうになった子を救おうとした途端	◇
宮古郡	川に落ちた子を救おうとすると	◇ 亡き母の涙
鹿児島県大島郡	川上からさで袋（漁網）が流れてきて、それを取ろうとしたら	◇
同	川上から流れてきた花を取ろうとしたら	◇
同 喜界島	爺に川に落とした煙草入れを拾上げるように頼まれ、取ろうとすると	◇★
同	水を飲もうとして背中の子がずり落ちそうになり、支えようとした時	◇
同	娘が、桑の木の根元に坐っていた時	▼○ 神様
薩摩郡	井戸の水を飲もうとして子がずり落ちそうになり、その途端。	◇▼ 明けの明星
鹿児島市	老人に教えられて、川を流れ下る花を取ろうとして	◇★
曾於郡	川を流れてくる花を掬い取ると自分の手だった。弘法大師のおかげ	◇★
宮崎県西都市	川を渡るとき子がずり落ちないように祈っていると	◇
長崎県南高来郡	観音詣で、和尚に言われたとおり、小川の水に触れて	◇●
有明町	川上から流れ来る花を掬ったら自分の両手だった、弘法大師の慈悲	◇★
下県郡(対馬)	高野山の御来迎の池に飛び込んで一週間後	◇★
同	地藏夫婦の教えにより	▲
同	観音様に祈り、水を飲もうと屈み、子が川に落ち、腕を差し伸ばした時	◇●
佐賀県鳥栖市	背中の子がずり落ちそう腕を回したら、観音様の慈悲	●
福岡県旧企救郡	泉で水を飲もうとして、落ちる子を救おうとして	◇
大分県東国東郡	子に水を飲ませようとしてずり落ちそうになり、掴まえようとして	◇
南海部郡	水を飲もうとしたら子が落ちそうになって、あと思った瞬間	◇
愛媛県北宇和郡	山奥の滝のそばに住んでいて、神様のおかげで	▼○
八幡浜市	谷川の水を飲もうとして子が落ちそうになった時	◇
温泉郡	お大師様のおかげで手がつく。継母の手が無くなる	★
越智郡	水を飲もうとして屈んだら子が落ちそうになり、お大師様を念じたら	◇★
宇摩郡	高野山中、子に水を飲ませようとした時	◇★
香川県丸亀市	浜に打ち上げられた魚を助け、魚の助言に従い塩水に腕を浸すと	◇▼
仲多度郡	善光寺に向けて旅立ち、水を飲もうとして小川に向かって俯くと	◇○
同	弘法大師が現れて両手を授けてくれる。継母の両手が奪われる	★ 四国巡礼
高松市	出家の言うとおりに水を飲んだら、手が蘇えり、高野山麓で奉仕	★
同	お大師様のおかげで、井戸端で手が生える	★
同	高野山で谷水を飲むと	★
香川郡	熊が温めたり傷口を舐めたりして治した	▼
徳島県三好郡	四国巡礼、お大師様のおかげ	★
同	水を飲もうとして落ちかけた子を救おうとして腕の切り口が浸かった時	◇
同	水に落ちた子を救おうとして腕を出す手が生えてくる。	◇● 観音様
同	お大師様のおかげで手が生えてくる	★
美馬郡	背中の子が川に落ち、腕を差し出すと、両手が流れてきてくっつく	◇
海部郡	子が流され娘も身投げするが、両手に子を抱いた姿で助かる	◇● 観音
島根県邑智郡	川で洗濯をしていると、両手が流れてきてくっ付いた	◇
同	子に水を飲ませようとする右手が来てくっ付いた。継母の右手だった	◇
同	川に落ちて泳いだ時、弘法大師のおかげで。	◇★
隠岐郡	田の水を飲もうとして子が落ちそうになった時	◇
同	観音様が川の中から出てきて、子を助け娘に両手を授けた	◇●
鳥取県東伯郡	高野山に行く途中、川に落ちた子を救おうとして	◇★▼ 熊／六部
八頭郡	坊主の指示に従い、川の水を飲むと子が落ちそうになった時。	◇★ 高野山
広島県比婆郡	宮に参った帰り、池で水を飲もうとした時	◇○ 虚無僧
某地	海や川を渡る時に躓いたとたん。	◇
岡山県阿哲郡	川で水を飲もうとして子が落ちそうになった時。弘法大師	◇★
真庭郡	海辺でしゃがんでいると、波が押し寄せてきて慌てて立ち上がった時	◇
苫田郡	水を飲もうとして親子とも池に落ちた時	◇

小田郡	御大師堂の滝の水に腕を浸けると	◇★
兵庫県美方郡	爺の言うとおりに、池の水を飲もうとすると子がずり落ちそうになった時	◇★
同	死のうと思って川に入ると	◇
朝来郡	川で水を飲もうとして子がずり落ちそうになり、観音様のおかげで	◇●
水上郡	大師さまの術で義妹の手が切られて、主人公の腕に付けられる	★ 大師堂
飾磨郡	川で水を飲もうとして子がずり落ちそうになった時。	◇★ 高野山
京都府丹波	子を川に投げ捨てるが、子の笑顔に思わず腕を差し伸べると	◇
和歌山県高野山	切られた指先は熊の夫婦に舐られて癒える。子が死に女人堂建立（『女人堂の由来』より）	▼★
三重県阿山郡	山中の熊が娘の傷をねぶって治した	▼
岐阜県吉城郡	白髪の老人が手を授けてくれた	★
大野郡	神に3721？日祈願して両手再生をはたす	○ 虚無僧
同	四国巡礼、乳を飲まそうとして子を落とし、救おうとして	★ 大師
静岡県賀茂郡	川に子どもを落とし救おうとしたら手をはえた。継母の手が無くなった	◇△ 明神／神社
山梨県西八代郡	和尚に言われたとおり、水を掬って飲もうとして子を落とした時	◇○ 六部
同	弘法大師に言われたとおり、湧き水の処で水を飲むと	◇★
新潟県長岡市	水を飲もうとして落ちそうになった子を救おうとした時。地蔵の両手が無くなっていた	◇▲
同	水を飲もうとして落ちそうになった子を救おうとした時	◇
見附市	水を飲もうとして落ちそうになった子を支えた時。背後のお地蔵さまの片手が無くなっていた	◇▲
佐渡郡	水を飲み子が落ちそうになるのを支えようとして	◇
同	お婆さんに言われたとおり、井戸の処で手の再生を祈ると	◇●
山形県新庄市	川で洗濯中、子が落ちそうになって、観音様のおかげ	● 観音堂
最上郡	清水に子が落ちそうになって手を出した瞬間、観音様のおかげ	●
長野県南佐久郡	お湯に入ったら手が出てきた	◇
埼玉県上尾市	よく働いていたら不思議なことに、山で鬼に取られた手がくっ付いた	▼
茨城県水戸市	井戸に落ちた子を助けようとして釣瓶に縋った時	◇
栃木県塩谷郡	高野山に行って拌み、堀の水に手を浸し、子が落ちそうになった時	◇★
同	坊主に教えられたとおり、沼の水を腕で掻きまわした時	◇○
福島県南会津郡	浅草の観音さまで口を漱ごうとして子が落ちそうになった時	◇●
宮城県仙台市	水を飲もうとして子がずり落ちそうになり、慌てて取り押さえた時	◇
本吉郡	千手観音が現れて、沼に落ちた子を救ってくれた	◇●
同	水を飲もうとして子が落ちそうになり、守本尊が手を授けてくれた	◇
岩手県北上市	観音様に祈願すると両手をはえてきた	●
稗貫郡	湯の神に詣で、湯の中に子を落とし飛び込んで助け上げた時	◇○
同	流れの水を飲もうとして子が落ちそうになった時	◇
花巻市	泉水を飲もうとして子を落としそうになった時、両手再生。婆は千手観音	◇●
同	水を飲んでいて子が落ちそうになり、救おうとして両手再生	◇
紫波郡	水に落ちた子はお婆さんに救われ、白水の川を渡ろうとした時、娘はその婆に突き倒されるが、その瞬間に両手が授けられた	◇●
岩手郡	爺の言うとおりに崖上の寺を目指して岩場を登っていた時	△ 八幡
九戸郡	所神さまに詣で、手水舎で子が落ちそうになり取り押さえようとした時	◇△ 所神
同	湧き水を飲めという天神さまの言うとおりにしようとした時	◇△ 天神
秋田県秋田市	お婆さんの言うとおりに、沼の水に手を浸けた時	◇●
由利郡	灯明をあげている二階建ての家の所で祈り、翌朝目覚めた時	○
青森県三戸郡	お堂の神に祈った。水を飲もうとして子が落ち、両腕に力をこめた時。	◇○寺/和尚/六部
南津軽郡	水を飲ませようとしたら子が落ちそうになり、掴まえようとした時	◇

\*清水による奇跡の事例は「◇」。物語の中で「白髪の爺」とあるのは弘法大師を指す場合があり、また「婆」は観音、千手観音の化身とされることがあるので、それぞれ「★弘法大師信仰」「●観音信仰」に分類した。地蔵信仰の事例は「▲」、神社神道系の神による奇跡話は「△」、一般的な神仏のおかげとするものは「○」の記号とした。動物や森林・山岳といった自然の治癒力による奇跡は「▼」とした。地図上には、繁雑を避けるため、1県につき同じ記号を複数個表示することはしなかった。



**Fairy Tale Gone Across Sea**  
**—Search for the Spread Route of the Japanese Legend**  
**“Daughter without Hands”—**

YOSHINOBU MORI

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

**Abstract**

The folktale “Daughter without hands” is handed down orally in various parts of Japan. The motif compositions and all story plots are similar throughout the many versions. People in Western Europe are presumed to have brought this fairy tale into Japan in the mid-16th century. The sailors and merchants of Portugal landed on Tanegashima and Kagoshima first, and brought the advanced technology of Western Europe such as guns to Japan. Missionaries of the Society of Jesus came continuously, and brought Christian doctrine and various spiritual cultures. They narrated the fairy tale which implied religious morals to people of the southern part of Kyushu. The tale then spread to the islands from Kagoshima to Okinawa.

Afterwards, people in Spain, Britain, France and Netherlands came to Japan, and the center of the exchange with them moved to Hirado and Nagasaki. The fairy tale spread widely as the activity of missionaries also spread to Chugoku, Shikoku, and the Kinki region to say nothing of Kyushu.

When Christianity became prohibited, and the limitation of trade with Western Europe to the Netherlands, the fairy tale gradually became non-Christianized, and transformed to a Japanese original content. It replaces Jesus, Maria, and sage Peter who appeared as a person who catches lightning in a bottle—both hands that had been chopped off were revived—, with Japanese Kobodaishi, the goddess of mercy, Jizoson, and gods of Shintoism.

**Key Words** (キーワード)

Japanese folktale (日本民話), fairy tale (メルヘン), hand (手), miracle (奇跡), daughter without hands (手なし娘), faith in pure water (清水信仰), divine protection (神仏の加護), falsify of letter (手紙の改竄), relationship between stepmother and child (継母・継子関係)